

大学を拠点とした子育て支援の継続性・安定性をはかる取り組み

——大学と地域との連携促進モデル事業の活動報告3——

岡田 由香¹, 緒方 京¹, 神谷 摂子¹, 大林 陽子¹, 志村千鶴子¹, 佐久間清美², 金尾 洋治³,
高橋 弘子⁴, 恵美須文枝¹

Third Activity Report on Promotion of Cooperative Infant Parenting Support Between College and Community

Yuka Okada¹, Miyako Ogata¹, Setsuko Kamiya¹, Yoko Obayashi¹, Chizuko Simura¹, Kiyomi Sakuma²,
Yoji Kanao³, Hiroko Takahashi⁴, Fumie Emisu¹

この事業は、平成19年度に魅力あふれる大学づくり関連事業、平成20年度から理事長特別研究事業としての交付を受け、継続してきた。今回、この3年間の活動実績と事業の成果をまとめた。この事業の内容は、本学周辺地域の子育て中の家族と学生・看護系教員、保育士などが出会い、学び合い、つながる場になることをねらいとして、子育てひろばの開催、子育て自助グループへの活動場所の提供、自治体の地域子育て支援事業への参画、母性看護学実習や学生ボランティア導入など教育の場としての活用等である。3年間の活動実績から、本学周辺地域の低年齢の乳幼児を抱える養護者に子育て支援サービスの需要が高いことがわかり、子育て家族への支援の成果を確認することができた。今後の課題は、子育て支援を担える学部内外の専門職者やボランティア人材を最大限に活用し、教育・研究と連動しつつ看護系大学の特色を前面に活かした地域の求める子育て支援の充足を図ることである。

キーワード：子育て支援、連携ネットワーク、大学の地域開放、大学の地域貢献

はじめに

平成19年度魅力あふれる大学づくり関連事業として「大学を拠点とした子育て支援による大学と地域との連携促進モデル事業」を実施し¹⁾、その後引き続き、平成20年度理事長特別研究費事業として「大学を拠点とした子育て支援の継続性・安定性をはかるための連携システム構築事業」を実施した。この事業を利用する親子は100組を越えることもあり、この地域の育児支援に対する需要が高いことが改めて確認された²⁾。この事業を実際に利用している親からも「親子ともに楽しみに来ている」と期待の声が多く、リピーターの親子も増え、定着しつつある²⁾。

これを受け、さらに平成21年度も理事長特別研究費の交付を受け、「継続性」「安定性」をキーワードにこの事業のさらなる充実化を図ってきた。

今回は平成19年度から21年度までの3年間の活動実績と参加者の声からみた事業の成果について報告する。なお、平成19・20年度事業の詳細は愛知県立看護大学紀要第14巻¹⁾・15巻²⁾を参考にされたい。

方法

この事業は未就園児とその養護者の子育て支援ひろばとして本学の体育館を地域に開放し（名称「子育てひろばもりっこやまっこ」、以下「子育てひろば」）、学生や教員、保育士・地域の保健師・子育て支援関係者等との連携をはかったものである。平成19年度は子育てひろばを実際に立ち上げ、活動実績の蓄積を行った。平成20・21年度も同様に活動を続け、その実績から継続性を促す連携システムの構築をはかった。また、子育て支援関係者とのネットワークの確立をめざし、連携体制を築きつつある²⁾。

¹⁾愛知県立大学看護学部（母性看護学）、²⁾愛知県立大学看護学部（地域看護学）、³⁾愛知県立大学看護学部（生涯スポーツ）、⁴⁾天使大学大学院

この事業の目標は、①大学と地域との連携による子育て支援ネットワークの確立 ②大学を拠点とした継続的な子育て支援活動を定着させるシステムの構築 ③子育て支援システムの実施による子育てしやすい街づくりにつながる大学の地域貢献 ④将来親となる学生への生きた教育現場の提供 である。

事業内容は、子育て中の家族と学生・看護系教員、保育士などが出会い、学び合い、つながる場になることをねらいとして、子育てひろばの開催、子育て自助グループへの活動場所の提供、自治体の地域子育て支援事業への参画、母性看護学実習や学生ボランティア導入など教育の場としてのひろばの活用 などである。

これらの3年間の事業の成果をみるために、活動実績は、日々の活動を記録した活動日誌から参加者数や居住地、子どもの年齢等を、個人が特定されないよう抽出し、集計した。参加した養護者からの意見については、各年度末2月の子育てひろばに参加した養護者に無記名自記式質問紙調査を行い、回答が得られたデータを分析対象とした。質問紙の内容は『参加したきっかけ』『参加した理由』『参加してよかったこと』等で、平成20年度からは『ひろばの満足度』『大学を地域に開放したことの評価』等の項目も追加した。なお、質問紙調査を行う際の倫理的配慮として、調査協力の自由、協力しない場合も不利益は及ばないこと、プライバシーの保護、データの厳重管理などについて口頭と文書で説明し、回収箱への投函をもって同意とした。

結 果

1. 年度別活動実績

参加する親子は年々多くなり、1回あたりの平均参加数でみると、平成19年度が37.3人に対し、平成21年度は119.5人と3.2倍の増加であった。また、平成20年度と21年度の参加数をみると、どちらも延べ数は5000人以上、1回あたり平均110人以上で定着している。つまり、毎回50組以上の親子が子育てひろばに参加していることがわかる。参加した養護者は母親だけでなく父親や祖父母の参加もみられ、毎回少数ではあるが夫婦での参加もみられている。午前と午後の参加数を比べると、3年間とも午前中の方が1.5~2.6倍多い(表1)。

参加した子どもの年齢内訳は各年度とも1歳代が50%と半数を占め、次いで平成21年度は2歳代、0歳代の順であった(表2)。表にはないが、参加者の特徴として、午前中の方が2歳代の子どもが多く、全体の参加数も多いのでとてもにぎやかである。一方、午後は0歳代、1歳代前半の子どもが多く、静かで落ち着いた雰囲気である。

参加者の居住地は大学周辺地域が多く、平成21年度データによると守山区からの参加は66.1%あり、その内、大学の所在地である志段味地区だけでも22.2%ある。次いで春日井市が19.4%で、守山区と春日井市あわせて85.5%と8割以上を占めている(表3)。来所手段は90%

表1 年度別子育て支援活動開催実績

単位：親子1組

	平成19年度	平成20年度	平成21年度
開催回数	32回	50回	49回
参加組数(人)	546(1192)	2608(5532)	2757(5856)
1回の平均組数(人)	17.1(37.3)	52.2(110.6)	56.3(119.5)
午前の平均	19.7(44.2)	80.1(169.8)	72.4(153.3)
午後の平均	13.6(28.5)	30.6(65.1)	39.4(84.3)

表2 年度別ひろば利用者の子どもの年齢

人(%)

	平成19年度	平成20年度	平成21年度
開催回数	32回	50回	49回
0歳児	184(28.9%)	561(19.2%)	416(13.6%)
1歳児	315(49.5%)	1574(54.1%)	1590(51.7%)
2歳児	63(9.9%)	663(22.7%)	813(26.5%)
3歳児	73(11.5%)	106(3.6%)	233(7.6%)
4歳以上	1(0.2%)	11(0.4%)	18(0.6%)
参加した子どもの総数	636(100.0%)	2915(100.0%)	3074(100.0%)

表3 平成21年度居住地別参加数

	参加者居住地												計
	守山区志段味	守山区他地区	守山区不明	春日井市	瀬戸市	尾張旭市	名東区	名古屋市他区	日進市	長久手町	小牧市	県内他市	
参加数(人)	611	1019	193	536	211	81	36	45	5	8	7	5	2757
%	22.2%	36.9%	7.0%	19.4%	7.6%	2.9%	1.3%	1.7%	0.2%	0.3%	0.3%	0.2%	100%

表4 年度別活動内容別参加数

	平成19年度	平成20年度	平成21年度
開催回数	32回	50回	49回
活動内容別	(1回の平均組数±SD)	(1回の平均組数±SD)	(1回の平均組数±SD)
自由ひろば*1	22回 (17.1±12.1)	45回 (54.3±28.5)	43回 (59.3±26.2)
育児講座	5回 (15.2±6.5)*2	2回 (26.0±8.5)*3	3回 (32.3±6.4)*4
親子サロン	5回 (16.8±8.3)*5	3回 (36.3±21.0)*6	3回 (37.7±7.6)*7
子育て自助グループ支援	2回	1回	7回
ボランティア研修会	1回 (参加者15人)		

- *1・遊具・絵本を設置し、体育館の広いフロアを利用した自由な活動
 ・ひろばスタッフによる育児相談を適宜受付
 ・平成21年度から身体測定と育児相談を組み合わせ実施(月1回程度)
- *2・体育教員による「ママの体操」 ・小児看護学教員による「子どもの病気とホームケア」
 ・子育て支援NPO法人代表による「子どもの安全プロジェクト」 ・子育て座談会
- *3・鍼灸師による「親子スキンタッチ教室」 ・体育教員による「ママの体操」
- *4・鍼灸師による「親子スキンタッチ教室」 ・県立図書館児童書司書による「絵本の選び方」
 ・子ども虐待防止NPO法人による「育児ストレスと上手につきあおう」
- *5・紙芝居と手作りおもちゃ ・保育士による「親子で手遊び」 ・リトミック講師による「リズム体操」
- *6・音楽療法士、ボランティアなどによるミニコンサート (2回)
 ・助産師でマタニティビクスインストラクターによる「親子でビクス」
- *7・音楽療法士、ボランティアなどによるミニコンサート ・体育教員による「太極拳教室」
 ・体育教員による「親子で体操」

以上が車であり、各年度同様の結果である。

活動内容別の参加は、平成20年度から自由ひろばの参加が多く、次いで親子サロン、育児講座の順であった。しかし、親子サロンや育児講座の参加は少なくはなく、平成21年度の参加数はどちらも1回あたり30組以上ある。参加者からは開催回数の増加や、開催する時間帯を終日行ってほしい等の要望が毎年出ている。また、子育て自助グループ支援については昨年からの課題であったため、平成21年度から積極的にアピールし、その活動が増えてきた(表4)。

子育てひろばスタッフの3年間の動員をみると、委託している有償の保育士・看護師のかかわりが大きく、平成21年度は62.4%と半数を超えている。3年間の動員率をみると本学の教員や保育士・看護師を合わせ80%以上かかっていることがわかる。一方、ボランティアの参加が減り続け、平成21年度は10%を切り8.9%であった。スタッフの1回あたりの述べ数は、平成19年度9.2人に対し平成21年度は7.3人と減り、スタッフの動員が減少している(表5)。

2. 参加した養護者の質問紙調査の結果

質問紙の回収数は3年間で402、有効回答数386(96.0%)であった。ひろばへの参加は1人の子どもを連れての参加が80%以上と多く、ひろばの利用頻度は「月に2回」、「ほぼ毎週」の順でみられ、このひろばの利用が高いことがわかる(表6)。

子育てひろばに『参加したきっかけ』は、各年度とも

表5 年度別子育てひろばスタッフの動員数 (%)

	平成19年度	平成20年度	平成21年度
開催回数	32回	50回	49回
母性教員	105(35.5)	206(44.7)	103(28.7)
地域教員	18(6.0)	-	-
保育士(有償)	108(36.5)	164(35.6)	183(51.0)
看護師(有償)	0	40(8.7)	41(11.4)
ボランティア	65(22.0)	51(11.0)	32(8.9)
内訳			
学生(再掲)	58	38	20
一般(再掲)	7	13	12
延べ人数	296(100.0)	461(100.0)	359(100.0)
延べ人数の平均	9.2	9.2	7.3

表6 年度別質問紙の有効回答数と対象の背景

	平成19年度	平成20年度	平成21年度
有効回答数(人)	138	135	113
参加1組あたりの子どもの数(%)			
1人	81.0	85.2	89.4
2人	17.5	14.8	10.6
3人以上	1.5	0.0	0.0
利用頻度(%)			
ほぼ毎週	3.6※	36.9	31.0
2回/月	11.7※	38.3	36.3
1回/月	84.7※	15.0	22.1
1回/2月		6.0	2.6
それ以下		3.8	8.0

※平成19年度は利用頻度を「5回未満」「5～10回」「10回以上」の選択肢で調査しており、開催回数から換算した。

「友達の紹介」が65%以上とほとんどで、口コミで広がっている（図1）。

子育てひろばに『参加してよかったこと』と『参加した理由』との回答は、両者共「広い遊び場」「子どもと外出できるきっかけ」「安全な遊び場」「屋内の遊び場」が上位を占め年々増加していた。次点の「同年齢の子どもとのふれあい」は3年間を通して一定した回答率を得ていた（図2、図3）。

『ひろばの満足度』は、「大変満足」「ほぼ満足」が平成20・21年度とも97%以上であった（図4）。『大学を開放したことの評価』は、「大変よい」が平成20・21年度とも94%以上を占めていた（図5）。

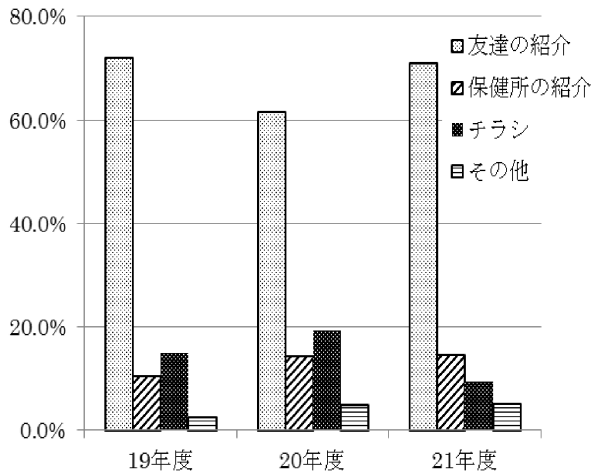


図1 年度別子育てひろばに参加したきっかけ

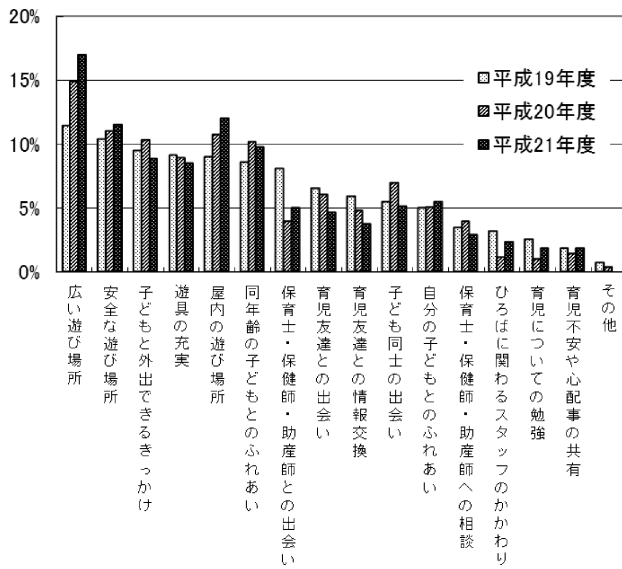


図2 子育てひろばに参加してよかったこと

子育て広場に対する養護者からの自由意見には「広くてのびのび遊ばせられる」「相談できる助産師もいて親自身の気持ちも楽になった」「学生さんが遊んでくれる」とあり、さらに「開催日を増やしてほしい」「保育士・助産師にもっと声を掛けてほしい」「学生にもっとかかわってほしい」「地域の高齢者にも来てほしい」との要望も多くみられた。また、「公園のないこの地域で看護大学の取り組みは素晴らしいと思う」「このような支援が他の地区にも広がってほしい」と、この事業を高く評価している記述がみられた（表7）。

3. その他の活動実績

1) 教育の場の提供

平成21年度から母性看護学実習の中で育児支援実習として、4年生（総数80名）の学生が年間開催回数50回のうち24回参加している。

また、平成20年度から看護学部の大学祭で学生主催の子育てひろばを開催し、その際の遊具等の貸し出しや調整等のサポートを行っている。

2) 研究の場の提供

卒業研究や母性看護学の教員研究のフィールドとして、平成20年度2件、平成21年度2件（卒研2件）の提供をしている。

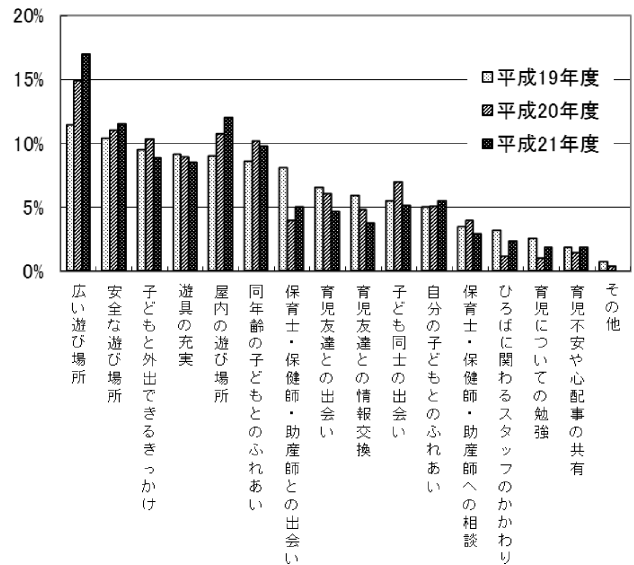


図3 子育てひろばに参加した理由

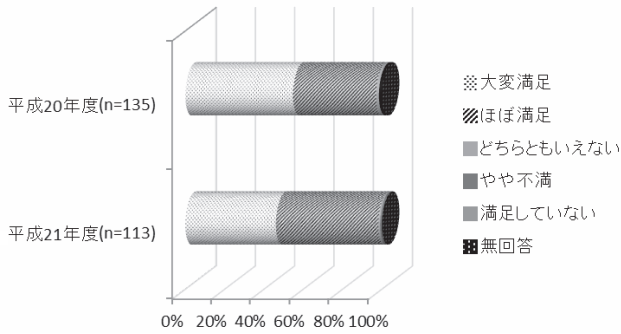


図4 子育てひろばの満足度

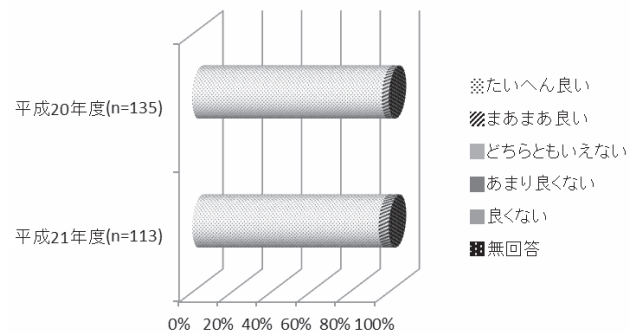


図5 大学を開放したことについて

表7 子育てひろばに対する養護者からの自由意見

20年度	<ul style="list-style-type: none"> ・広いので子供ののびのびと遊ばせられる ・日数、曜日を増やしてほしい ・保育士、助産師がもう少し話しかけてほしい ・大学の施設を地域に開放してもらえるのは大変有意義 ・公園のないこの地域で看護大学の取り組みは素晴らしいと思う ・他の地区にも拡がるとよい
21年度	<ul style="list-style-type: none"> ・相談できる助産師もいて私自身の気持ちも楽になった ・年齢に合った遊具がある ・学生さんが遊んでくれる ・たくさんの同年代の子とふれあいでできる ・地域の高齢者にも来てほしい ・学生にもっと関わってほしい ・開催をホームページで公開してほしい

3) 地域貢献

平成20年度より守山区子育て支援ネットワーク連絡会の委員および守山区子育て支援事業実行委員会として、守山区主催の子育てひろば「もりやまっこ」の企画・運営会議に参加。子育て支援関係機関と人的な交流や情報交換をはかっている。

また、平成20年度より守山区志段味西地区の主任児童委員が開催する親子サロン（年に2回）に学生（7.8人）とともに出前講師に出向き、地域に向かっての大学の専門的機能を生かす機会をはかっている。

考 察

3年間の子育てひろばの活動実績から、参加数は定着して毎回50組以上あり、本学周辺地域である守山区や春日井市において、0歳から2歳までの低年齢の乳幼児を抱える養護者に、子育て支援サービスの需要が高いことが示唆された。本学は公共交通機関が少ないため、幼い子どもを連れての参加には手軽さ、便利さが重要で、大学が有している駐車場を無料で活用できることが参加者増加の大きな要因であり、大学が提供する子育て支援

サービスの強みであることもわかった。

本学の設備は子育て支援のための設備ではないため、子育てひろば開催中の親子の安全を見守ることや学内での事故等が起きないように常に配慮する必要がある。そのためには保育士や看護師などの専門職がスタッフとしてかわかることは重要と考える。また参加数が多くなるほどマンパワーは必要で、養護者の質問紙調査からも、「学生や地域の高齢者にもっと関わってほしい」「スタッフにもっと声をかけてほしい」などの要望がある。しかし、スタッフの動員数は減り、ボランティアの参加が減り続けている現状があり、子育て支援を担える学内外の専門職者やボランティア人材の発掘・確保が昨年度から引き続き検討課題である。また、専門職者との出会いの機会を増やすことも今後の課題である。今までは保育士や教員等がひろば開催時に必ず常駐し、親子が安全に遊ぶことができるよう見守り、子育ての相談等に随時応じるようにしていたが、専門職者の存在をよりアピールし、資源を活用してもらうため定期的に育児相談を行う機会を作っていく必要がある。

子育てひろばの広報活動は3年間変わらず、チラシ配布のみという限られた条件にもかかわらず、子育てひろ

ばは毎回新規参加者が10名程度ある。また、母親同士でメールアドレスの交換をしたり、インターネットの情報交換サイトから子育てひろばを知って参加した親子が3年間変わらず多い。ひろばが3年目になってからは気の合う母親たちがグループで参加したり、育児自助グループが活動場所として依頼してくることが多くなり、本学の子育てひろばの認知度が広がっているように見受けられる。子育てひろばの開催だけでなく、守山区の子育て支援ネットワーク連絡会や地域の子育て支援サービスに教員が参加することで人的交流が促され、地域の子育ての現状把握や子育てに関する情報交換ができ、本学の子育てひろばの認知度を広めることにつながったことも考えられる。このように地域とのつながりが強くなり、大学が地域に開かれ、地域貢献を担う役割を果たすことは今後も重要であろう。

子育てひろばに参加した理由やよかったことは両者ともほぼ同じで「広い遊び場」「子どもと外出できるきっかけ」「安全な遊び場」「屋内の遊び場」が年々増加していた。また3年間変わらず高かったのは、「同年齢の子どもとのふれあい」「遊具の充実」で、これらの要素が安心で安全な遊び場所になっていることがうかがえた。これらの結果は、この地域における未就園児を抱える親の子育て支援サービスを考える上での重要な要素と考える。

事業目標にある将来親となる学生への生きた教育現場として子育てひろばを活用するために、平成21年度からは母性看護学実習の中で育児支援実習として取り入れる試みをした。このことは、子どもの成長発達を日ごろの学習に関連させて深められることや養護者との関わりをとおして対人能力の向上を目指すことができる³⁾。乳幼児やその養護者と大学生という異世代間のコミュニケーションは、看護学生にとって貴重な学習体験になり得る。このように大学のもつ資源を地域の子育て支援に活用することは、学生の教育効果を高める機会としても有用と考える。また、大学ならではの事業を考えると教育の場としてではなく、研究の場としても子育てひろばが活用されることががぞましい。教育・研究と連動しつつ看護系大学の特色を前面に活かした事業を考えることは、学生だけでなく教員も、看護職者として大学教員としての子育て支援サービスをとらえ、自身の専門職としての自己研鑽の場になり得ると考える。

以上のことから、本事業をとおして地域の子育て家族への支援の成果を確認することができた。また、事業の目標である子育て支援ネットワークの確立、活動を定着

させるシステムの構築、大学の地域貢献、生きた教育現場の提供については、到達までいたっていないが、進行しつつある。この目標を達成するために、事業のプログラムを今後さらに検討していく必要がある。そのためには、大学の教育・研究機能の向上と地域貢献を実現する事業として看護系大学の特色を前面に活かしながら、地域の求める子育て支援の充足を図ること、子育てに関する知識・技術を有する学部内外の教員やボランティア人材を最大限に活用し、地域住民への専門的知財提供の場にするとともに、子育てしやすい地域づくりのための負担の少ない運営システムを構築すること等が検討課題である。

まとめ

以上のことから、3年間の活動実績と事業の成果をまとめると、

- (1)本学周辺地域では、低年齢の乳幼児を抱える養護者により子育て支援サービスの需要が高く、未就園児の養護者が自分の子どもと同年齢の遊び友達を求めて集える場となっていた。
- (2)子育てに追われながらも友達との携帯電話でのメール交換やインターネットの情報交換サイト等で子育てに関する情報を入手し、子どもを連れていける広くて安全な屋内の遊び場を求める養護者の姿、および大学の体育館という場所への期待と効果が伺えた。
- (3)看護系大学が子育て支援の場として大学体育館を開放した成果として、子育て支援施設としては近隣に類のない広さで、子どもがのびのびと活動でき、かつ目が届く場の安全性・安心さを提供できた。広いがゆえにたくさんの参加者が集まり、同年代の子ども同士・その子どもの親同士がふれあい、学びあいやすい環境となった。乳幼児やその親と大学生という異世代間のコミュニケーションが促されるような人的支援環境を提供できた。人材と知識を生かした教育の場の提供とともに、看護職者である教員が臨床家として自己研鑽を積む場が得られた。
- (4)上記(1)(2)(3)から本学周辺地域の子育て家族への支援実績を積むことができた。
- (5)今後は子育て支援を担える学部内外の専門職者やボランティア人材を最大限に活用し、教育・研究と両立連動しつつ看護系大学の特色を前面に活かしながら地域の求める子育て支援の充足を図る必要がある。

おわりに

この事業は平成21年度 理事長特別研究費の交付を受けて行ったものである。この事業を始めて3年になるが、毎年思うのは教育業務の傍らに事業に携わるため、制約や限界があり、活動が十分にいたらないことである。今ではなくてはならない保育士、看護師スタッフに助けられ、支えられて3年間この事業を継続することができている。年々増してくる「継続」、「連携」の重みを感じながら、この子育てひろばを楽しみにしてくれている親子のためにも、何らかの形で今後も取り組んでいきたい。

この事業に携わってくださった保育士、看護師、本学の教員と職員、外部講師の皆様に深謝いたします。

参考文献

- 1) 岡田由香, 高橋弘子, 佐久間清美, 金尾洋治, 山口江利子, 神谷摂子, 緒方京, 志村千鶴子, 大林陽子: 大学を拠点とした子育て支援の取り組み—大学と地域との連携促進モデル事業の活動報告一. 愛知県立看護大学紀要. 第14巻: 113-120, 2008.
- 2) 岡田由香, 高橋弘子, 佐久間清美, 金尾洋治, 神谷摂子, 緒方京, 志村千鶴子, 大林陽子: 大学を拠点とした子育て支援の取り組み—大学と地域との連携促進モデル事業の活動報告2一. 愛知県立看護大学紀要. 第15巻: 33-38, 2009.
- 3) 恵美須文枝, 鈴木享子, 高橋弘子, 岡田由香: 育児支援ボランティア提供者の活動に対する評価. 第15回日本保健科学学会学術集会, 2006.